

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：16102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2016

課題番号：26370627

研究課題名（和文）小学校英語教科化に伴う「文字」指導の小・中接続カリキュラムの開発

研究課題名（英文）Curriculum Development for Literacy Instruction Connecting Elementary to Junior High School

研究代表者

畑江 美佳（Hatae, Mika）

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：20421357

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：平成32年度より開始される小学校外国語の教科化を想定し、「文字」に特化した小・中接続シラバスモデルを提案する研究を行った。平成26年度から、鳴門教育大学附属小学校の5・6年生で「大文字・小文字の認識」「アルファベットの音への気づき」「サイト・ワード・リーディング」の指導を行い、平成27年度も継続して行い、文字認知の検証をした。同時に、附属中学校の1年生の初期の授業にて、小学校での文字の学習との接続を意識したリーディングに重点を置いた多読授業を試行した。さらに、平成28年度は、附属小学校での試みを、公立の小学校で実践してもらい、附属小学校と共に、公立小学校での「文字」の扱いの有効性を測定した。

研究成果の概要（英文）：The implementation of foreign language instruction in elementary school is anticipated to become a subject by 2020, which lead us to conduct research focused on literacy instruction in elementary school and to consider how to connect it to the English education in junior high school. From 2014, Grade 5 and 6 in Naruto Fuzoku Elementary School had started practicing “capital letters and lowercase letters”, “phonemic awareness” and “sight word reading”, and we tested and verified the effects of these methods. On the other hand, Grade 7, which included the graduates of our elementary school, had attempted extensive reading. Moreover, another public elementary school was chosen to practice the same method for literacy and the result of which was evaluated in 2016.

研究分野：外国語教育

キーワード：小学校英語 文字指導 小・中接続

1. 研究開始当初の背景

2013年5月、教育再生実行会議による小学校英語の教科化や対象学年の前倒しの提言を受け、同年10月23日、文部科学省は、次の学習指導要領の改訂において、英語の開始時期を小学校3年生から週1~2回、5年生からは教科化及び週3回の実施を想定し、基本的な読み書きなど中学校の学習内容を一部取り入れるとする方針を固めた。今後、小学生への文字指導に関しての議論が高まると考えられた。しかしながら、小学校における文字の導入には、適期に適切な方法を見極め慎重に行わなければ、単に中学英語の前倒しとなり、一層、英語への関心や学習意欲を奪いかねない懸念があった。

2. 研究の目的

小学校での無理のない楽しい文字導入を経て中学校に進む、継続的指導を可能にするカリキュラムを構築することは、将来の英語教育の重要な課題である。よって、本研究では、小学校英語の「教科化」を見据え、文字指導に焦点を当て、小学校から中学校へ繋ぐ具体的な文字の指導法を確立することを目的とした。

3. 研究の方法

人が何かを理解、または学習する過程で、データの中にある語や文の情報を利用する方法はボトムアップ・アプローチ (Bottom-up Approach: 上昇アプローチ) と呼ばれ、一方、既に持っている知識を利用し、入ってきた情報を理解または処理をしようとすることをトップダウン・アプローチ (Top-down Approach: 下降アプローチ) と呼ぶ。これらの両方を取り入れたモデルが「バランスト・アプローチ」である。バランスト・アプローチの基本概念は、様々な方法で指導する、音韻認識能力とアルファベット文字のしくみの理解が必須、フォニックス指導によるスペリング力や単語分析力をつける、意味を理解するために読む、豊富に読書を楽しむ、想像的論理的思考力を育てる、ことである (鈴木・門田, 2012)。

これを、日本の小学校の英語学習に適用するように試案したものが、図1である (畑江, 2015)。小学校からリテラシー指導をする場合、中学以降、自発的に正しく英語を読める力を育成することまでを視野に入れ、その初期段階からの系統立った「読む」ためのプログラムを確立する必要がある。あくまでも音声言語の土台があることが前提になるが、初期のボトムアップ・アプローチとして、「アルファベットの大文字・小文字の名前読み」→「アルファベットの音への気付き (phonemic awareness)」→「フォニックス」へと段階を踏むことにした。また、同時にト

ップダウン・アプローチとして、中学年の外国語活動からの「文字のある環境での音声指導」→「絵本の読み聞かせ (文字も見せながら)」→「絵本のなぞり読み」へと進む。この流れの中で、読めるようになったアルファベットを「書く」作業や、絵本を通して学んだ表現を使い、自分の伝えたい言葉を選んで「書く」作業なども少量ずつ盛り込んだ。

実際に、バランスト・アプローチによるリーディング指導を、英語の授業の一部に取り入れることで、教え込みではなく自然に英語を「読む」力がつくかどうかの実践を行い、それぞれの指導法を検証した

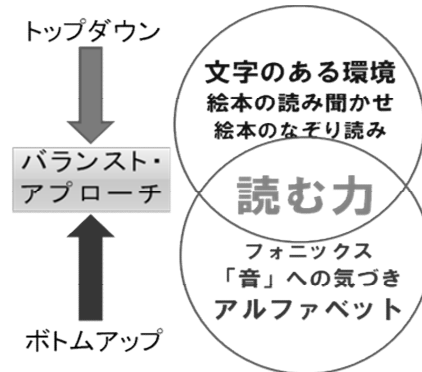


図1 初期の「読む」力を育てる
バランスト・アプローチ

4. 研究成果

(1) 文字のある環境作り

『Hi, friends!』には文字表記が殆どないが、授業ではピクチャー・カード、ワークシート、英語でのやり取りの際は、必ず絵には文字を添え、教室の壁面も有効に活用し、児童が自然に文字に触れる工夫をしたところ、児童は抵抗なく文字のある環境に慣れ、授業の折々で、文字を介しながら活動する様子がみられた。

(2) アルファベットの大文字・小文字

「700年以上をかけて大文字から小文字に変化した過程」を自分達で考えさせ (図2)、その答えを動画で見せるICT教材 (図3)を開発、活用し、大文字と小文字を切り離さずに同時に与えた。その後、特に小文字の読み書きには時間をかけて指導した。その結果、小文字26個の書き取りで、公立小学校5年生 ($t(69) = -1.122, p < .01$), 6年生 ($t(89) = -7.856, p < .01$) で有意差が認められた。

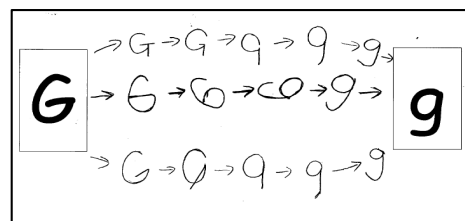


図2 小文字の成立ちを考える

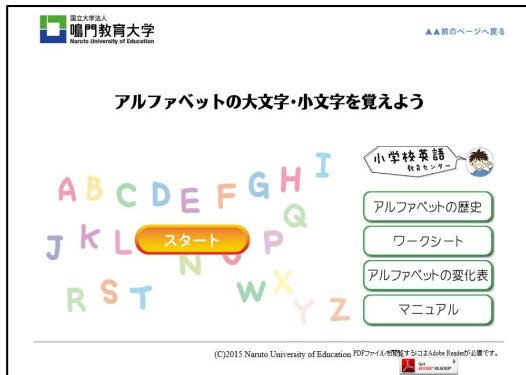


図3 DVDのスタート画面

(3) アルファベットの「音」への気づき
歌やカードを用い, “a says a, a, apple.”等, 英語の「音」になじませ, その後ワークシートで音と文字の線つなぎや単語の頭の文字を書かせる作業を授業内に取り入れ, 2年間継続したところ, 「無意味語」(例: zoc)を読んで正確に発話する調査で, 15問の合計値において対応のある t 検定で有意差が認められ ($t(110) = 54.32, p < .05$), 「無意味語」を聞いて書く調査においても 10問の合計値で有意な結果となった ($t(110) = 29.58, p < .05$).

また, 指導前の語尾への母音添加が活動後には減少した。例えば, “zoc” を/zoku/と発話していたものが, 指導介入後には, 正しい発音, /zak/に改善された(図4)。歌やゲームを通じて, 英語特有の「音」を計画的, 継続的に学習することで, 児童は英語を正しく読む「すべ」を手に入れることができたと考えられる。

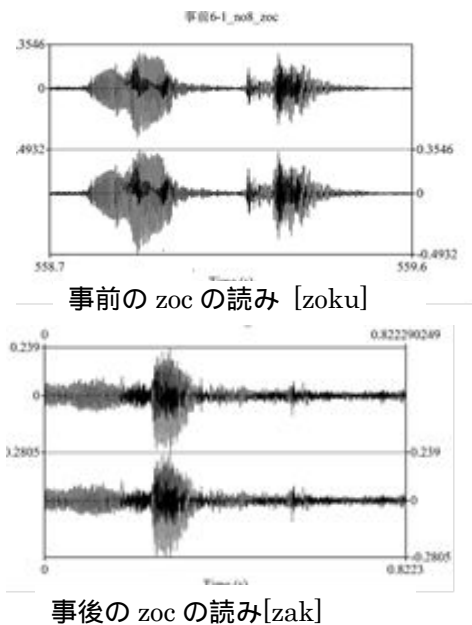


図4 「無意味語」zocの読みの変化

(4) サイト・ワード絵本のなぞり読み
英語の読み方には不規則なものが多く, それを小学生に教え込むことには無理がある。

そのため, 1ページに絵と1文が載り, その繰り返しで構成される簡単な絵本(*Sight Word Readers: Scholastic*)を使用し, サイト・ワードを個々の単語としてではなく, 意味のある絵本の中で, なぞり読みしながら, トップダウン・アプローチとして包括的に認知し, 文を流ちょうに読めるようにする方法を取った。

Farm Friends という絵本では, “I” と“see”というサイト・ワード以外に “a, cow, horse, hen, sheep, duck, pig, goat, farm” の9語が使用されており, “I see a cow.”の動物の部分だけを入れ替えたシンプルな文が続く。CDには動物の鳴き声も加えられており, 楽しみながらページをめくる工夫が施されている。児童はスクリーン上の絵を見ながら “I see a cow”, “I see a horse”, “I see a hen.”と聞いて話を楽しみ, その後, 絵本の内容を簡単に振り返り, 一ページずつ全員でリズム良く読んだ。次に冊子を一人一冊ずつ配り, 文字を追うようになぞり読みしながら発話する。ペアで交互に読み合い, 最後には好きな1ページを先生に読み聞かせる。平成26年度, シリーズの中の3冊を, 附属小学校6年生で活用し, 事前と事後にテストをし, 対応のある t 検定にかけたところ, 「単語を聞いて綴りを選ぶ」 ($t(110) = -3.673, p < .01$), 「文を読んで意味を表す絵を選択する」 ($t(110) = -8.566, p < .01$) の合計値で有意差が認められた。

次に, IBM SPSS Text Analytics for Surveys Ver.20を用い, 自由記述に7名以上の出現頻度のあるものをカテゴリー分けし(○の大きさ参照), それぞれのカテゴリーとどのように関連しているか(線の太さ参照)を表示した(図5)。傾向として, 「本を読むことは楽しい・面白い・よい」, 「本を読むことは簡単」, 「読むことをもっとやりたい」, 「書いてみたい」と読み取れる。また, 自由記述の詳細を検証したところ, 「読み・書きがとても簡単だったのでもっと難しいものをしたかった」, 「もう少しストーリー性のある難しい本を読んでみたかった」, 「難しい文字を読むのは, もっとやる気がでてくる」等, もっと難しいものを読みたいというポジティブな意味を持つ文脈で「難しい」という言葉が使われていた。

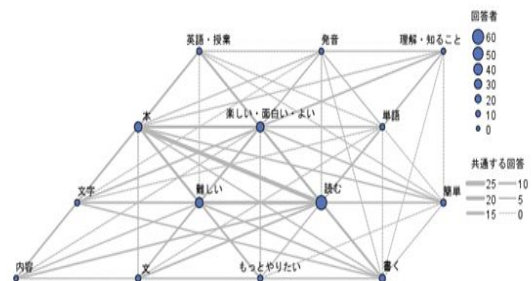


図5 自由記述のテキスト・マイニング

以上のバランスト・アプローチによる小学

校からの文字指導を、スモールステップで十分に時間をかけ、多様な指導による実証研究をした結果、(2)アルファベットの大文字・小文字、(3)アルファベットの「音」への気づき、(4)サイト・ワード絵本のなぞり読み、の指導において、指導前と後との間に有意な差がみられた。

これらの授業実践と調査結果を踏まえ、「読む力」をつけることに焦点を当てた系統立ったプログラムを作成した(図6)。今後、3年生から開始される外国語活動では、文字のある環境で音声指導を始め、アルファベットの大文字・小文字の読み書きを徐々に指導する。そして、5年生になった頃から、英語の「音」への気づきを与え、並行して絵本を使ったホール・ランゲージ的な文字指導を加えていく。これによって、中学1年生になった時に、教え込みではなく、自らフォニックスのルールへ集約し、単語や文を自分の力で読めるように導くことができよう。

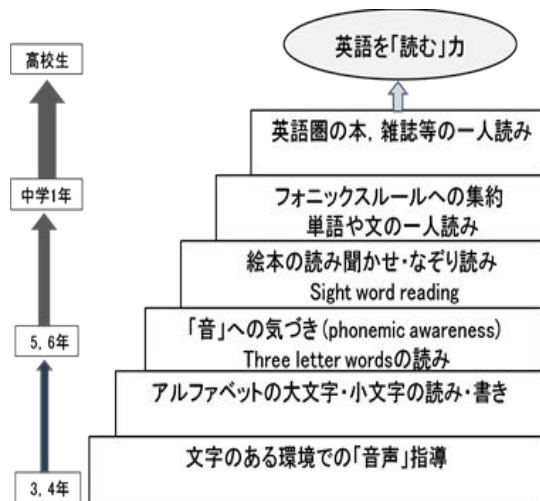


図6 「読む力」をつけるためのプログラム

【引用文献】

鈴木寿一・門田修平 (2012)『英語音読指導ハンドブック』 大修館書店。

畑江美佳 (2015)「小学校でどのように文字を導入するか 「適期」に「適切」な文字指導を」『英語教育』2015年2月号, 大修館書店。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

畑江美佳・段本みのり (2017), 小学校におけるアルファベット指導の再考 - 文字認知を高めるデジタル教材の開発と実践 - , *JES Journal*, 17, 25-35, 査読有

青山祥子・畑江美佳・段本みのり (2016)「読むこと・書くこと」に対する中学年児童の学ぶ意欲を育む取り組み - アクティブ・ラ

ーニングに繋げるための素地作り - , 四国英語教育学会紀要, 36, 65-74, 査読有

畑江美佳・段本みのり (2016) 外国語活動におけるサイト・ワード・リーディングの試み, *JES Journal*, 16, 34-49, 査読有

マーシェソ・ジェラード (2015) Roles and Limitations for Assistant Language Teachers in Elementary School English Classes, 鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要, 7, 27 - 36, 査読有

畑江美佳・長倉若・島田祥子・段本みのり (2014) 読み書き能力素地作りのために小学校からできること: Phonemic Awareness を促す外国語活動の実践, 鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要, 4, 11 - 20, 査読有

〔学会発表〕(計6件)

畑江美佳・長倉若・青山祥子, 「バランスト・アプローチによる文字指導 - 「音素への気づき」を「内容理解の読み」に繋げる小学校英語の試み - 」全国英語教育学会, 2016年8月20日, 獨協大学(埼玉県・草加市)

畑江美佳, 段本みのり, 「小学校におけるアルファベットの大文字・小文字指導の再考 「大文字が先か, 小文字が先か」デジタル教材の開発と実践」小学校英語教育学会, 2016年7月22日, 宮城教育大学(宮城県・仙台市)

畑江美佳・長倉若, 「小学校英語教科化に伴う文字指導のあり方 - phonemic awareness から reading へ繋げる指導の実践: 2年目 - 」全国英語教育学会, 2015年8月22日, 熊本学園大学(熊本県・熊本市)

畑江美佳・段本みのり, 「外国語活動におけるサイト・ワード・リーディングの活用 - トップダウン式「読む」技能習得の一方法として - 」小学校英語教育学会, 2015年7月26日, 広島大学(広島県・東広島市)

畑江美佳・長倉若・ジェラード・マーシェソ, 「小学校英語教科化に伴う「文字」指導のあり方と方法 - 音素への気づき(phonemic awareness)を促す活動の実践研究 - 」全国英語教育学会, 2014年8月9日, 徳島大学(徳島県・徳島市)

畑江美佳, 「小・中の「文字の段差」を埋めるために小学校からできること - 「読む」ための初めの一步としての絵本のなぞり読み」, 小学校英語教育学会, 2014年7月26日, 関東学院大学金沢八景キャンパス(神奈川県・横浜市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

畑江 美佳 (HATAE, Mika)
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・
准教授
研究者番号：20421357

(2)研究分担者

石濱 博之 (ISHIHAMA, Hiroyuki)
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・
教授
研究者番号：00223016

ジェラード マーシェソ

(MARCHESSEAU, Gerard)
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・
准教授
研究者番号：60403763

(4)研究協力者

長倉 若 (NAGAKURA, Wakasa)

ナンシー ダルコーティボ
(DALCORTIVO, Nancy)

溝口 愛 (MIZOGUCHI, Ai)

青山 祥子 (AOYANA, Shoko)

段本 みのり (DANMOTO, Minori)